View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Research Institute for Humanity and Nature Repository

カムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群の諸方言における弱強型の韻律特徴と分節音に見えるその反映形

鈴木 博之

キーワード：カムチベット語、sDerong-nJol 方言群、弱強型韻律、強弱型韻律

[要旨] 本稿では、中国四川省得榮県から雲南省徳欽県にかけて話されるカムチベット語諸方言（sDerong-nJol 方言群）において観察される 2 音節語の第 1 音節に含まれる分節音がさまざまな形で弱化する現象について、具体例を整理しつつその現象に対して弱強型の韻律構造を仮定することによって説明を試みる。また、これに対して、近接地域には強弱型の韻律構造をもつ方言も分布しており、類型の違いがあることを示す。

1　はじめに

筆者はかつて鈴木 (2011b) において、カムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群[1] の諸方言における 2 音節語の初頭位置における有気音の無気化現象を報告した。この現象はチベット言語学上の類型にとって稀有なものであり、その具体的な言語現象を具体例とともにまとめることに一定の価値が見いだせるものであったが、このような音声現象に対する言語学的解釈は当時与えることができなかった。本稿では、この現象を含め、複数の際立つ分節音に認められる現象について、「弱強型」の韻律特徴の枠組みを導入することで統一的に説明を与えることを試みる。また、当該地域のカムチベット語諸方言に「強弱型」という異なる韻律特徴をもつ方言も共存していることにも触れ、類型の違いがあることを示す。

チベット系諸言語に関する先行研究において韻律が議論されることはほとんどない。韻律が音韻論的な機能を担わないことが背景にあると考えられる。ところでチベット系諸言語のうち、いくつかの言語群には超分節音素が存在し、基本的に語を単位として弁別機能をもっている。この超分節音素の発生という歴史的観点からの議論において、古い段階で強勢の有無の存在を認めるという議論が起こり、強勢の位置に基づいて超分節音のパターンが決まるという仮説が提出された（Caplow 2009）。ところが、強勢はピッチ型超分節音素（声調）をもたないアムドチベット語のような言語では音声学的により明確に現れることがあるが、声調をもっているカムチベット語などの言語ではあまり明瞭でなく、その代わりに軽声を認める分析が通例である。

[1] sDerong-nJol 方言群は中国四川省甘孜藏族自治州得榮県から雲南省迪慶藏族自治州徳欽県にかけて分布するカムチベット語の 1 方言群である。下位区分として、sDerong 下位方言群、雲嶺山脈西部下位方言群、sPomtserag（奔子欄）下位方言群、mBalhag（巴拉）下位方言群と gYagrwa（羊拉）下位方言群に分かれる。カムチベット語をめぐる方言区分については鈴木 (2009b)、Suzuki (2009a:17) を参照。雲南省のカムチベット語についての最新の見解は鈴木 (2012d) を参照。

本稿で議論するカムチベット語諸方言では、強勢が音声学的な卓立を伴って現れることはないため、強勢が音体系上機能していると言うことができない[2]。超分節音的音特徴にはおよそ明瞭な強勢の特徴が認められず、逆にチベット言語学上奇妙な現象が分節音に起きている。この現象を説明するために、「強さを伴わない架空の強勢パターン」（これを韻律特徴と呼ぶ）を設けて議論してみる。

2　韻律特徴とその要点

本稿でいう韻律特徴とは各方言における音韻単位ではなく、実際に生じている音声現象を効果的に説明する仮説的なものである。韻律特徴の現れを要約すれば、次のようになる。

- カムチベット語得榮徳欽方言群の諸方言は、基本的に「弱強型」の韻律特徴をもつ。
- 「弱強型」の韻律特徴は、第１音節の分節音に何らかの変化が生じる。
- ただし、例外的に「強弱型」の韻律特徴をもつ方言を認める。
- 「強弱型」の韻律特徴は、第１音節に強勢が実際に置かれることで実現することが多い。

韻律特徴は、その性格上、複音節語（音韻語）の初頭２音節（声調が機能する単位）に対してのみ適用される。また、韻律特徴というのは音韻単位ではないため、音声実現として特定の現象が義務的に実現されるという性格のものではなく、自然な発話において特に認められるものと考えて差し支えない。むしろ意図的に発話速度を遅くした場合[3]には以上の韻律特徴が失われることがあるため、特定の自然な発話速度があって初めて実現するものである。

弱強型の韻律特徴の場合、その作用は分節音に生じ、語構成における各形態素が（音韻）語の中で果たす役割（たとえば語幹、接辞など）にかかわらず適用される。それゆえ、第１音節の弱化が意味とかかわりなく自動的に起こる一方、実際の発話において適用されるか否かは容認度に何ら影響を与えない。ただし、方言によっては語彙的に現象が固定されており、自由変異とはみなせない場合がある。また、有気無気の双方を許容できるが、有気音での発音に対して「自らの方言らしくない」といった印象を抱く母語話者も存在する。

加えて特定の語では、それぞれの韻律特徴が想定されうるより古い段階の形式に作用し、そののち音変化が生じたため、現代の形式を解釈するにあたって特別な説明を与える必要性が存在する事例もある。このことから、韻律特徴というものは最近になって生じたものではなく、ある程度古い時期から存在した、もしくは各方言の成立時期にすでに潜在的に存在していたものではないかと考えられるが、現段階では詳細に述べることができない。

---

[2] おそらくピッチ型超分節音素をもつほとんどのチベット系諸言語において、強勢は超分節音的音声実現をもたないと見込まれる。そのため、音声記述において強勢という用語で説明する現象は存在せず、理論的な音韻解釈のために用いるものとして理解しておく必要がある。本稿では、「強勢」という用語を、明瞭な超分節音的音特徴を伴う現象が認められるときのみ用い、それ以外を音体系の外に位置する「韻律」という枠組みと用語で表す。

[3] たとえば語彙調査時に各音節を人工的に区切って発音するときなどが該当する。

3　「弱強型」韻律特徴の具体的な事例と分析

本節では「２音節語の初頭位置における有気音の無気化現象」および「２音節語の初頭位置における母音/a/の弱化現象」という２つの独立した現象[4]を、「弱強型」の韻律特徴を仮定することを通して共通の説明を与える。

議論に先立ち、本稿で扱う「弱強型」韻律特徴が仮定される諸方言の下位区分と分布地域をまとめておく。この韻律特徴は sDerong-nJol 方言群のうち、mBalhag（巴拉）方言と gYagrwa（羊拉）方言を除いて認められる。すなわち、sDerong 下位方言群、雲嶺山脈西部下位方言群、sPomtserag（奔子欄）下位方言群に適用できる。これらの下位方言群に属する諸方言は、四川省得榮県から雲南省徳欽県にかけて分布し、金沙江および瀾滄江沿岸部に広く分布する。これらの周辺に分布する Sems-kyi-nyila（香格里拉）方言群や Chaphreng 方言群（郷城）には、「弱強型」韻律特徴が適用される例が見受けられない（分布については、末尾の地図１、２を参照）。

以下、音声表記には正書法的な表記を用いず常に音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。

3.1　２音節語の初頭位置における有気音の無気化現象

この現象は鈴木 (2011b) で具体例を整理した。ただし最近の調査によって、若干更新するべき情報が見つかったので、まず最初にそれを補足しておく。鈴木 (2011b) では、この現象は特に金沙江流域で話される諸方言に認められると述べたが、徳欽県升平鎮阿東村で話される Adong（阿東）方言および同県佛山郷で話される Foshan（佛山）方言にも同様の現象が認められることが分かった。これらは金沙江沿岸ではなく、むしろ瀾滄江に近い地域で話される。本稿では Adong 方言の例について、後に言及する。

さて、具体的な現象の検討に入る。２音節語の初頭位置における有気音の無気化現象というのは、チベット文語形式（以下「蔵文」）を見れば理解できるけれども、もしも条件にあう２つの１音節語からなる複合語の場合、共時的に現象を説明することも可能である。sDerong 下位方言群に属する Zulung（日龍）方言の例で考えると、次のようになる。

/˜tɕʰɯ/「水」　＋　/ˋɲiʔ/「目」　＝　/ˊtɕɯ ɲiʔ/「泉」

˜tɕʰɯ という形式は、単独で「水」を表す語である。このとき、この語の初頭子音は有気音であり、また有気音でなければならない。この語がˋɲiʔ「目」という語と複合語を形成するとき、ˊtɕɯ ɲiʔ となって「泉」という語義で用いられる。複合語を形成したとき、上に示したように、有気の性質が認められなくなる。もしも「水」が第２音節に現れるような複合語を形成したとき、このような無気化は認められない。ちょうど「水」「目」の順序を逆にした形式が存在し、˜ɲiː tɕʰɯ「涙」という語になるが、第２音節初頭の有気音は有気音でなければならない。なお、

[4] 現段階の調査では、これら２種の現象が１つの方言内で共起する例をほとんど見いだせていない。ただし、以下にも言及するように、共起する方言も存在する。

いずれの２音節語の場合も第２音節に強勢が音声学的に強さを伴って現れることはない。また、３音節以上からなる場合にもこの現象が現れることがあるが、３音節以降は軽声であるため無視できる。

Zulung 方言の場合、以上と並行する状況において、語頭音節が無気音になるものと有気音のまま維持されるものの２種の例が共存し、どちらになるかはほとんど語ごとに決まっており、一定の発話速度においては互いに自由変異ではないことが多い。ただし、たとえば上記「泉」の各音節を調査時のように特にゆっくりと発音してもらうような場合には、第１音節の初頭子音が無気化することはない。以下に、Zulung 方言の調査語彙約 2000 語の中から複音節語で第１音節初頭子音が無気化する例を掲げる。

語義	Zulung 方言	蔵文
氷	´tɕa ɖõ	*chab rom*
泉	´tɕɯ ɲiʔ	*chu mig*
温泉	´tsaː tɕʰɯ	*tsha chu*
唇	⁻ⁿ̥̊tɕɯ rɯ	*mchu ru*
脇	⁻ⁿ̥̊tɕẽ kʰõ	*mchan khang*
親指	´ⁿ̥̊tə tɕʰẽ	*mthe chen*
犬歯	⁻ⁿ̥̊tɕi wa	*mchi ba*
友人	`pu ɕɑʔ	*pho shar*
孫息子	´tsa wu	*tsha bo*
孫娘	´tsa ɦõ	*tsha mo*
子ぶた	´pə ɦu	*phag gu?*
桃	´ka mõ	*kham bu*
粥	´toː ba	*thug pa*
階上	ˆkõ tʰuʔ	*khang thog*
階下	ˆkõ ʑoʔ	*khang zhod*
ふた	´kaləʔ	*kha leb*
縄	´tɑː pa	*thag pa*
経堂	⁻tɕuː kʰõ	*chos khang*
経院	⁻tɕuː ʱde	*chos sde*
白塔	⁻ⁿ̥̊tɕuː ɖĩ	*mchod rten*
区別	⁻tɕeː pa	*khyad par*
昨日	´ka tsõ	*kha rtsang*
大きい	ˆtɕa wu	*che bo*
別々の	´ka kʰa	*kha kha*

以上の例を見れば、無気化する語は多くが名詞であることがいえる[5]。また、以上の語の構成に注目すると、第２音節に蔵文で *pa, ba, bu, bo, mo* などの形式が来る例が複数ある。これらは語幹の一部ではなく接尾辞である。しかも蔵文形式で第１音節が開音節で接尾辞が b で始まっている「犬歯」「孫息子」「大きい」の例の場合、接尾辞の初頭子音が/w/になっているのは、接尾辞に弱化の規則（*p/*b > /w/）が働いていることを示している。もしも有気音の無気化を理論的に説明するために強勢を認めるとするならば、接尾辞に強勢を置くというのは類型的に見て稀な事例であり言語事実として特定の強さとして実際に接尾辞を強く発音するという現象も認められない。この場合に弱強型の韻律特徴を仮定して現象を理解することができると考える。ただし、Zulung 方言の場合には、有気音の無気化が認められない例も少なからず存在する。たとえば、以下のようである。

語義	Zulung 方言	蔵文
貯水池	´tɕʰu ⁿdzɵʔ	*chu mdzod*
つば	´kʰa tɕʰɯ	*kha chu*
商人	ˉtsʰõ ᵐba	*tshong pa*
母ぶた	ˉpʰɑː mã	*phag ma*

これらのような例には弱強型の韻律特徴が反映しなかったのかという疑問が残る。当然ながら、１つの言語に複数の韻律特徴が認められてもよいわけであるが、適用条件は現段階では不明である。

さて、Zulung 方言の有気音の無気化には、もう１つのタイプがある。次のような例である。

語義	Zulung 方言	蔵文
雨	´tɕɑː	*char ba*
雪	´kɑː	*kha ba*

これらの例は、蔵文が示すように、そもそもは２音節語であったものと理解できる。有気音の無気化は単音節語では起こりえない[6]ため、無気化したのちに２音節が縮約を起こしたものと考えるのが妥当である[7]。２音節の縮約は他の語でも周辺の諸方言にも見られるため特筆に値する現象ではないが、これもまた一定の条件にしたがって規則的に現れるものではなく、語

[5] 「子ぶた」の例について、蔵文の語形式としての *phag gu* は存在しない。しかし Zulung 方言の形式や周辺の方言形式も対照すると、指小辞 *gu* のついた *phag gu* のような形式が推定されうる。sDerong 下位方言群に属する sDerong 方言には、ここで取り上げている有気音の無気化現象はほとんど見られないが、「子ぶた」は´puːという形式で現れる。

[6] ただし注意の必要な語がある。それは「犬」で、蔵文では *khyi* と有気音であるが、Zulung 方言では/ˉtsə/というように無気音で現れる。これは古蔵文の *kyi* と対応するものと考えられ、本稿で取り上げている現象とは関連がない。無気音の「犬」の問題については、西 (1986:850) も参照。

[7] 以降に述べる Adong 方言において、さらに興味深い例が認められる。

彙的に決まっている[8]。加えて、縮約した語の声調パターンは上昇調が大部分を占め、少数例に高平調が認められる。下降を伴う例がほとんど見られない点に注目できる[9]。

次に雲嶺山脈西部下位方言群に属する Adong 方言の例について、簡単に触れておく。Adong 方言は現在調査途中であるため、多くの実例の収集には至っていないが、次のような例が認められる。

語義	Adong 方言	蔵文
泉	ˆtɕɤ ʱnʑiʔ	*chu mig*
温泉	´tsa tɕʰɤ	*tsha chu*
唇	´ᵐ̥tɕu pa	*mchu pa*
腎臓	´ᵑ̥kɛː la	*mkhal ma*
ぶたの糞	ˆpɑʔ ʰtɕɑʔ	*phag skyag*
犬の糞	ˆtɕə ʰtɕɑʔ	*khyi skyag*
鳩	´pɔʔ ʱɖɯ̃	*phug ron*
桃	´kɑ̃ ᵐbɤ	*kham bu*
もみ殻	´pɤ wɑ̃ʔ	*phu mag*
上半身	ˆkõ ʰtɯʔ	*khog stod*
下半身	ˆkõ m̥eʔ	*khog smad*
昨日	´ka tsɔ̃	*kha rtsang*
おととい	ˆkɛː ŋeː	*khas nyin*
さきおととい	´kɛː ʱʐa ŋeː	*kha gzhes nyin ka*
雪	´kɑː / ´ka wa	*kha ba*
雨	´tɕɑː	*char ba*
とげ	´tsõː	*tsher ma*

Adong 方言の例を見ると、Zulung 方言と語義と形式の面で共通するものが多いと言える。以上のうち、「ぶたの糞」「上半身」「下半身」の例は語頭子音が有気音になっても許容されるが、それら以外は無気音である必要がある[10]。なお、「雪」の例は、１音節形式と２音節形式の２つが併存する。この例は２音節語が縮約して１音節になる過程を反映しているものと理解できる。

次に sPomtserag 下位方言群に属する Shogsum（書松）方言の例を見る[11]。

[8] 方言ごとに現れる語が異なる点については、鈴木 (印刷中) を参照。

[9] これを韻律特徴とからめて分析することも可能であるかもしれないが、議論は別稿にゆずる。

[10] 「犬の糞」の例について補足しておくと、Adong 方言では「犬」は/ˋtɕʰə/のように初頭子音が有気音となり、調音位置も前部硬口蓋になる。Zulung 方言では無気音で実現されるため、第１音節の有気音の無気化には当てはまらないが、Adong 方言の場合は当てはまる。

[11] Shogsum 方言および sGogrong 方言の「子ぶた」の形式は、注５で述べたように、Zulung 方言と並んで蔵文と確実に対応しているとは言えない。詳細は Suzuki (2009b:80-81, 2012) を参照。

語義	Shogsum 方言	蔵文
雨	´ce wa	*char ba*
土手	´cɑ rɑʔ	*chu rag*
唇	´cɯ pa	*mchu pa*
肝臓	¯ci mba	*mchin pa*
つば	´ce mõ	*chu ma*
甥	´tsa wu	*tsha bo*
子ぶた	´piː ɖwe	*phag phrug?*
鴨	¯cɯ ʐa	*chu bya*
鳩	´pu ɖwĩ	*phug ron*
桃	´kɑ̃ mo	*kham bu*
屋根	´ko ʰti	*khang steng*
傘	´ca ʱdɔʔ	*chu gdugs*
縄	´te jiʔ	*thag pa*
昨日	´ka tsɔ̃	*kha rtsang*
おととい	´kɛ ȵi me	*khas nyin*
あなたたち	´tɕi ȵa ji ʈa	*khyod tsho*
大きい	´cɤ ɦu	*che bo*
雪	´kɑː	*kha ba*

また、同下位方言群 sGogrong（古龍）方言にも以下のようなものが認められる。

語義	sGogrong 方言	蔵文
雨	´ce wa	*char ba*
溝	´ca ʰka	*chu rka*
唇	´cɯ pa	*mchu pa*
甥	´tsa wo	*tsha bo*
子ぶた	´pe ɖɤː	*phag phrug?*
大きい	´cə wo / ´cʰə wo	*che bo*
雪	´kɑː	*kha ba*

sPomtserag 下位方言における諸方言においても有気音の無気化現象は一致する例が少なく、認められる例の数も異なる。しかしながら、第２音節の形態論的特徴は Zulung 方言と同じくさまざまであり、単純に複音節という環境で有気音の無気化が生じているといえる。

3.2　２音節語の初頭位置における母音/a/の弱化現象

鈴木 (2012a:126) における雲嶺山脈西部下位方言群に属する Sakar（斯嘎）方言の記述の中で、筆者は/a/の音声実現に次のような記述を与えた。

「**/a/**　複音節語において、最後以外の音節に現れる場合は [ɜ] 程度で発音される。」

この記述に、さらに次のような注を施した。

「例によってはさらに舌位置が高くなり、[ə] で実現されることも珍しくない。このような場合には/ə/と記述する。」

加えて、名詞化接辞の記述（鈴木 2012a:134）においても、次のように述べた。

「名詞化接辞が接続するにあたり、先行する語が１音節語の場合、/a/で終わる語は/ə/になったり（略）」

これは名詞化接辞が付加される場合だけとは限らず、条件に合う２音節の形式ならば、すべての例について起こりうる現象である。ただし、母音の質に変化が及ぶだけで、声調に明確な変化はなく、観察の限りでは非音韻的要素である強勢にも影響が見られない。それゆえ、この現象は音韻規則ではないと言い切ったし、その考えについて変わるところはない。この現象は/a/以外の母音では起こらないのも注目に値する。

以下に Sakar 方言における蔵文で第１音節が*-a#*で終わる形式の音対応について、音声形式の具体例をあげる[12]。

	語義	蔵文	Sakar 方言音声表記
(1)	斯嘎 [地名]	*sa dkar*	[ˉsʰɜ kaː, ˉsʰə kaː]
(2)	漢語	*rgya skad*	[ˆʱdʑa ʰtɕiʔ, ˆʱdʑɜ ʰtɕiʔ]
(3)	食べ物	*za-mi**	[´sɜ mə, ´sə mə]
(4)	食べなかった	*ma-za*	[´mə za]

上の (1, 2) は複合語の例、(3) は動詞語幹に名詞化接尾辞がついた例、(4) は動詞語幹に否定接頭辞がついた例[13]である。以上の例は形態論的にさまざまな語構成を示しており、いずれの場合でも第１音節の母音は/a/と分析しうるけれども、[ɜ] または [ə] で発音され、[a] で発音されない。特に (1, 3, 4) は [a] の発音が許容されない。

この現象は、Sakar 方言のみならず、雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言の中で、前節で述べた有気音の無気化現象をもたない方言に広く認められ、これらの方言でも/a/以外に母音が変

[12] いくつかの口語形式は、完全に蔵文と対応するものをもたない。そのような例には、仮定される蔵文形式をあげ、*を付す。また、音声形式においても声調だけは分析済みの形式で記す。

[13] 蔵文の否定辞には *ma* のほかに *mi* もある。後者は通常の蔵文対応形式として/mə/という発音が期待されるが、Sakar 方言をはじめ、雲南省で話されるほとんどのカムチベット語方言は/ɲi/という形式になることから、*ma* が [mə] と発音されても混同されるおそれはない。

化することはないという観察結果を得ている[14]。ところが、前節で取り上げた Adong 方言は例外的で、第 1 音節の有気音の無気化現象に加えて/a/の音声学的な弱化もまた認められる。ただし、Sakar 方言などと異なり、音環境の条件を満たすすべての例に自動的に生じるものではなく、複合語を形成するときに限られ、また弱化した場合の音声実現も [ɜ] 程度にとどまる。

以上のような現象はチベット語全体を見てもまれな現象であるといえる。これについて、筆者は「弱強型」の韻律特徴が存在することによって起こっているのではないかと考える。

4　「強弱型」韻律特徴について

本節では、「弱強型」ではなく「強弱型」の韻律特徴をもつタイプの方言について mBalhag 方言を例に検討し、また韻律特徴の型の分布について短い考察を加える。

4.1　現象

このタイプをもつ方言には、mBalhag 方言があげられる。すでに鈴木 (2012d:60) において、次のような記述を与えた。

> 「複音節語について語単独での発音では、第 1 音節に聴覚印象として明瞭な強勢が置かれる例が存在する。強勢が置かれた場合、その直後すなわち第 2 音節以降の声調が低平調で実現される。また、第 2 音節以降に強勢が置かれる例は認められない。しかしながら、強勢の実現は現段階の資料において対立が認められず、かつ自由変異であり、現れても現れなくても許容されるため、一律表記しない。」

「弱強型」と違って、「強弱型」の場合は明瞭な強勢が置かれる点で大きな差異が認められる。一方、強勢が音韻的に機能していない点を考慮すれば、この事例も韻律特徴という枠組みにおいて現れる非音韻的要素と理解するのが妥当であると考える。

mBalhag 方言の場合、調査資料に基づくと、「強弱型」になるのは第 1 音節が接辞でないことが条件であろうと考えられる。つまり、各種接頭辞を伴う動詞に「強弱型」は現れない。たとえば、次のような例は「強弱型」の韻律特徴をもっている。

	語義	蔵文	mBalhag 方言
(5)	泥棒	*rku ma*	ˋʰkɯ mə
(6)	低い	*dma' mo*	ˋʱmɔ ma
(7)	草	*rtswa*	ˋʰtsə wa
(8)	唐辛子	*si pen*	ˋbə gu

(5, 6) の第 2 音節は接尾辞の一種と考えられるから、語幹部に強勢が置かれるのは自然といえる。(7) の場合、第 2 音節は蔵文に含まれる足字 w の対応形式であると見られ、語幹の一部で

[14] 同下位方言群に属する lCagspel（佳碧）方言では、より複雑な事例も見受けられる。この方言名は蔵文で *lcags spel* となり、老年層では/ˋʰtɕɑʔ ʰpeː/と発音されるが、若年層ではより漢字音に近い/ˋʰtɕa ʰpjeː/となる。後者の場合、第 1 音節が/a/で終わるため、音声実現としては [ˋʰtɕə ʰpjeː] となることもある。

あると考えられる[15]。(8) の形式は蔵文と対応しない方言形式[16]であり、語幹と接尾辞の関係であるかはわからない。いずれにせよ語幹でないものが第１音節に来ている形式には「強弱型」はあまり現れないのであるが、語構成が「語幹＋接尾辞」のものすべてが「強弱型」を取るとは限らないため、規則性があるとはいえない。

4.2　分布

mBalhag 方言のように、強勢が明確に強さとして現れるタイプの方言は少ない。ただし、第２音節の分節音に弱化の特徴が認められるような方言は確かに存在し、そのような方言を「強弱型」の韻律特徴をもっているものと分析するならば、さらに複数の方言が「強弱型」の韻律特徴をもつ例としてあげることが可能であるほか、「強弱型」の韻律特徴のほうが広範囲のチベット語諸方言に認められる特徴であるといえる[17]。

雲南省のカムチベット語において２音節語の第２音節の初頭子音が弱化する現象について、数詞「１」(*gcig*)、「２」(*gnyis*) と「11」(*bcu gcig*)、「12」(*bcu gnyis*) の関係を地理言語学的観点から取り扱った鈴木 (2012c) は、当該箇所で弱化が生じる方言が主に香格里拉県に分布していることを明らかにした[18]。方言分類の観点から見ると、Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群と雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江東岸に分布する諸方言、さらに Chaphreng 方言群のすべての諸方言[19]に認められる。一方、「弱強型」韻律特徴を仮定した sDerong-nJol 方言群には、この現象は認められていない。また、Sems-kyi-nyila 方言群の中でも、雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江西岸に分布する諸方言（維西県塔城鎮で話されるものを除く）や Melung 下位方言群、Lamdo 下位方言群に属する諸方言にも「強弱型」を仮定する必要はないようである[20]。

---

[15] 雲南省で話されるほとんどのカムチベット語において、蔵文足字 w に対応する形で/w/が口語形式に現れる。それが蔵文のように語幹部分のわたり音位置に現れるものと、mBalhag 方言のように２音節になって現れるものと、２通りに分かれる。具体的な記述については、鈴木 (2008, 2009a, 2012b) を参照。

[16] mBalhag 方言の「唐辛子」の形式は、雲南のカムチベット語に広く認められる (Suzuki 2009b:85)。

[17] たとえば複音節語の名詞について考えるとき、ユー・ツァン地域のチベット語諸方言やカムチベット語 Derge（徳格）方言などにも、第２音節の初頭子音について弱化とみなされる音変化が起こっている（格桑居冕・格桑央京 (2002:24-25, 99-102)、星 (2003:xii-xiii) など）。

[18] 弱化の具体的事例としては、「１」の初頭子音は前気音つきの無声無気破擦音（調音位置は個別に異なる）である一方、「11」の第２音節に現れる形態素「１」の初頭子音は有声破擦音になるものや有声摩擦音で現れるという形になる。このような音交替は弱化と判断できる。

[19] 香格里拉県内に分布する gTorwarong 下位方言群の諸方言に加え、四川省側の郷城県で用いられる方言も含む。なお、鈴木 (2007:23) で扱っている郷城県のカムチベット語諸方言において、「32」などのきりの悪い数詞が、蔵文では *sum cu so gnyis* と４音節から形成されるのに対して、第２音節の対応形式が脱落する現象があるが、これは強弱型の韻律特徴によるものであるかもしれない。この点についての詳細な検討は別稿にゆずる。

[20] Melung 下位方言群に属する Zhollam（勺洛）方言では、語によっては複音節語の各音節に声調の型が指定されるものがあり（鈴木 2011a:5）、音節ごとの独立性が高い例も見受けられる。これはカムチベット語の中でも類似の特徴をもつ方言をあげるのが困難であるため、珍しい類型に入るといえる。

以上、本稿で「弱強型」「強弱型」と呼んだものは、これら２つの韻律特徴を指定する必要のない方言も含め、分布の観点からも方言区分の観点からも、かなりの程度まとまって現れていることがいえる（末尾の地図２参照）。

5　まとめ

本稿では、主に sDerong-nJol 方言群の諸方言に認められる、分節音に生じる複数の異なった現象について、韻律特徴という概念を用いて統一的に説明を与えることを試みるとともに、韻律特徴の類型的な異なりと方言の分類について若干の考察を加えた。

韻律特徴は「弱強型」「強弱型」の２種に分類され、雲南省で話されるカムチベット語について適用される方言群は、韻律特徴を指定する必要のないものを含め、以下のようになる。

弱強型　sDerong-nJol 方言群（mBalhag 下位方言群および gYagrwa 下位方言群を除く）

強弱型　Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群、雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江東岸に分布するもの、Chaphreng 方言群、sDerong-nJol 方言群 mBalhag 下位方言群

指定不要　Sems-kyi-nyila 方言群雲嶺山脈東部下位方言群のうち主に金沙江西岸に分布するもの（維西県塔城鎮で話されるものを除く）、Melung 下位方言群、Lamdo 下位方言群、sDerong-nJol 方言群 gYagrwa 下位方言群

「弱強型」「強弱型」という韻律特徴は各方言の音素体系の中では音韻的に機能しないと見込まれるけれども、各方言を特徴づける要素になる。大局的な観点から見ると、方言の類型について新しい観点から分類できる可能性が見えてくるものと考える。加えて、韻律構造の異なりが発生した歴史的背景もまた興味深い検討課題になりうるだろう。

また、韻律特徴として扱った種々の現象について、調査において容認度に関する聞き取りによる確認作業は困難であり、したがって当該形式を「言わない」（不自然さ）と「言えない」（非文法的）の異なりを判別することもまた困難である。できる限り多くの自然発話や語りなどの事例から実際に起こっている現象を収集し、傾向を見出す必要がある。

本稿の試みは最初期段階のものであり、今後とも記述を積み重ねるとともに理論的な側面からも検討を重ねる余地のあるものである。

参考文献

鈴木博之 (2005)「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1–23

—— (2007)「甘孜州郷城県カムチベット語の方言特徴」『ニダバ』第 36 号 17–26

—— (2008)「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』第 37 号 115–124

—— (2009a)「迪慶州金沙江流域カムチベット語（奔子欄/尼西/拖頂/霞若/其宗方言）の方言特徴」『ニダバ』第 38 号 29–38

—— (2009b)〈川西地区 “九香線” 上的藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第 3 期 17–29

—— (2011a)「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛 [Zhollam] 方言の文法スケッチ」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』３, 1–35

—— (2011b)「四川・雲南境界部金沙江流域のカムチベット語における有気音の無気化現象」『ニダバ』第 40 号 75–81

—— (2012a)「カムチベット語燕門・斯嘎 [Sakar] 方言の文法スケッチ」稲垣和也編『地球研言語記述論集』４（大西正幸博士還暦記念号）, 123–158

—— (2012b)「迪慶州香格里拉県中央域カムチベット語（建塘/小中甸/格咱方言）の方言特徴」『ニダバ』第 41 号 61–70

—— (2012c) 《雲南藏語土話中的特殊数詞形式：其地理分布與歴史来源》第二届中国地理語言學国際學術研討會發表論文（南京）[《第二届中国地理語言學国際學術研討會　會議論文集》125–134]

—— (2012d)「カムチベット語香格里拉県巴拉 [mBalhag] 方言の方言特徴」『国立民族学博物館研究報告』2012-37 巻１号 53–90

—— (印刷中)「カムチベット語雲嶺・査里通 [Tsharethong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第７号

西義郎 (1986)「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11 巻４号 837–900 + 1 地図

西田龍雄 (1987)「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108–169 冬樹社

星泉 (2003)『現代チベット語動詞辞典（ラサ方言）』アジア・アフリカ言語文化研究所

Caplow, Nancy (2009) *The role of stress in Tibetan tonogenesis: a study in historical comparative acoustics*. PhD dissertation at University of California Santa Barbara

Suzuki, Hiroyuki (2009a) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —. In : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15–34, National Museum of Ethnology

—— (2009b) Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan. In : Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*, 71-96, National Museum of Ethnology

—— (2011) *Development of prepalatal and palatal articulations in Khams Tibetan spoken in bDechen Shangri-La (Yunnan)*. Paper presented at 17th HLS (Kobe)

—— (2012) *Tibetan* pigs *revisited : multiple* piglets *with a* sow *in Yunnan Tibetan and beyond*. Paper presented at 1st International Conference of Asian Geolinguistics (Tokyo)

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館

[付記]

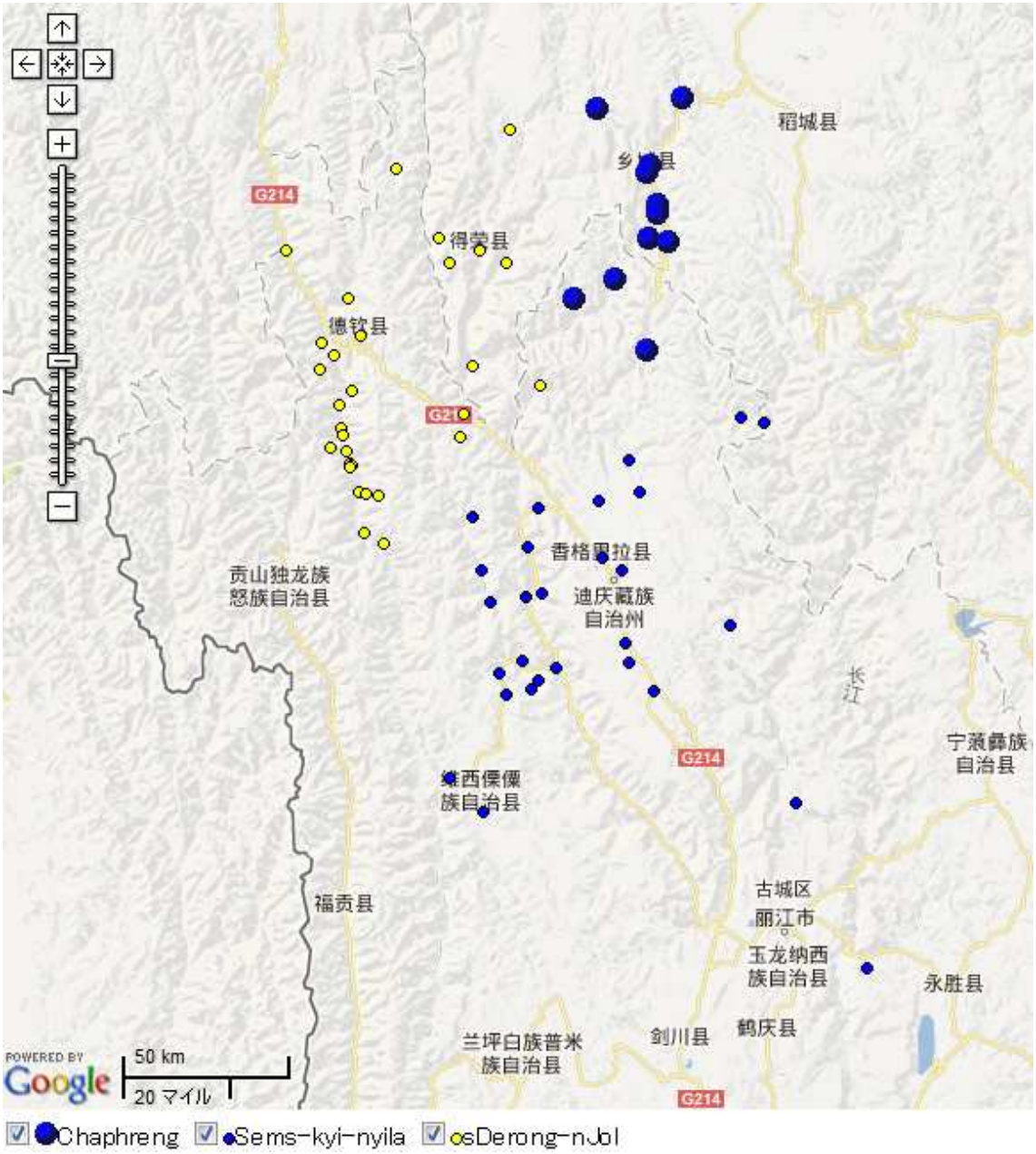
筆者による各種言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

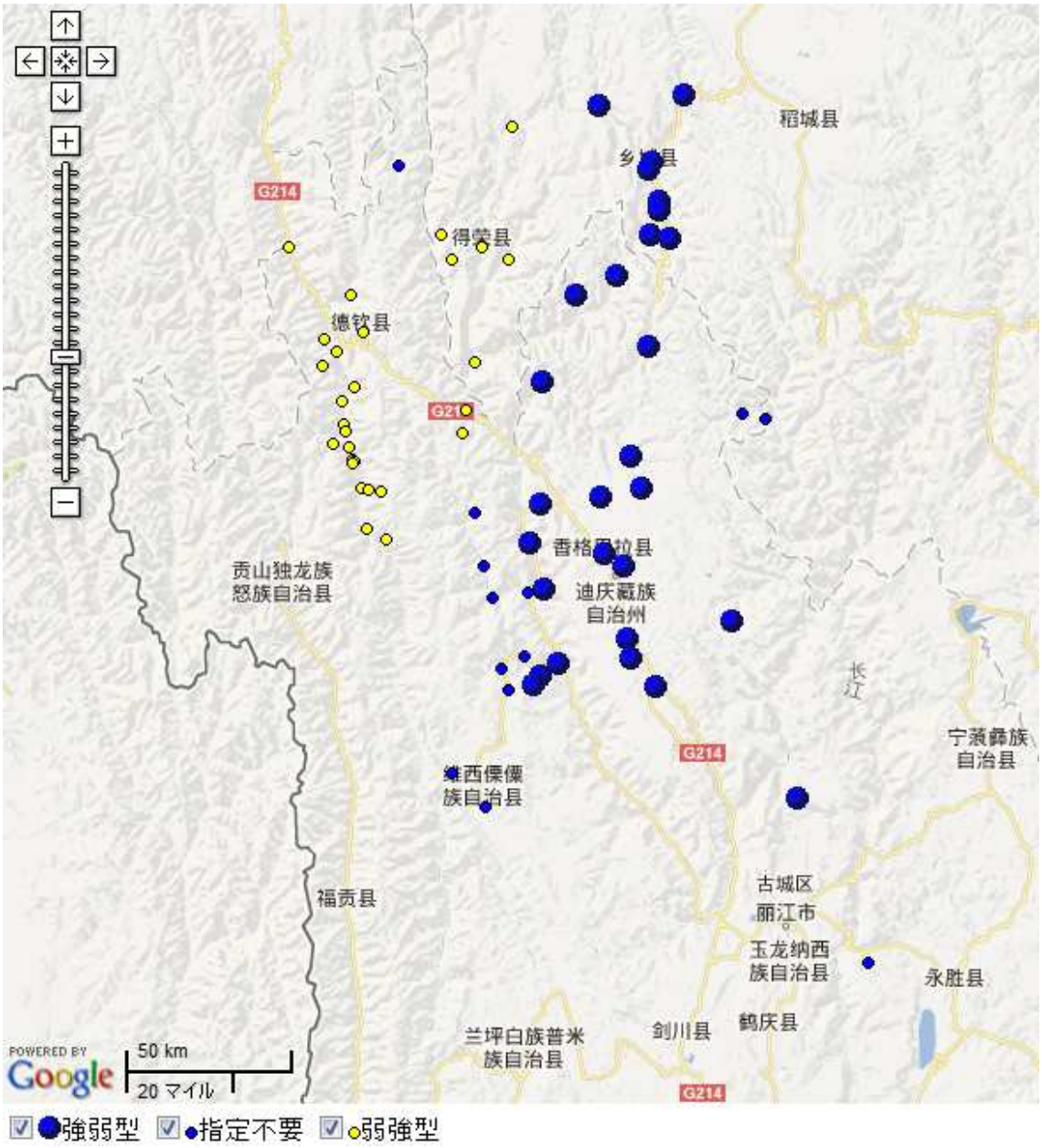
- 平成 16-20 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001）
- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007）

地図

以下の地図は Geocoding を用い、Google Maps をもとに描いたものである。表示するのは、筆者の調査したカムチベット語 sDerong-nJol 方言群・Sems-kyi-nyila 方言群・Chaphreng 方言群に属する諸方言の計 69 地点である。

地図 1：雲南を中心とするカムチベット語の方言分類



方言分類は方言群レベルで分類して表示している。

地図 2：韻律特徴の分類と分布